

論文提出者： 富樫耕介

論文題目：チェチェン紛争再発の複合的なメカニズムの解析（1997-99）—紛争構造のダイナミズムと平和定着—

本論文は、第一次チェチェン紛争（1994-1996）と第二次チェチェン紛争（1999-）の間に位置する1997-1999年の紛争移行期に注目し、なぜ紛争が再発したのかを総合的、複合的に明らかにしたものである。チェチェン紛争はソ連解体とロシア連邦への移行過程でロシア連邦内で唯一大規模な武力行使を伴った紛争であるが、その紛争再発のメカニズムについては十分には研究されてこなかった。

本論文の構成と各章の内容は以下の通りである。序章では、先行研究の批判的紹介や資料の説明等がなされている。第一章「比較と理論の中のチェチェン紛争」では、本論文の分析枠組みである、「二重の対立構造」（「領域をめぐる対立」と「政府をめぐる対立」）、「複合的なディレンマ」、「状況悪化のスパイラル」の説明が述べられている。さらに、紛争の理論的な検討が、紛争の発生、紛争再発のメカニズム、未（非）承認国家の問題等についてコンパクトにまとめている。第二章「第一次チェチェン紛争とその後の課題」では、ソ連末期のペレストロイカ期にチェチェンの民族運動がなぜ分離主義運動へと発展していったのか、さらに第一次紛争がチェチェンの国内勢力を団結させたことを明らかにした。事実上チェチェン側の勝利に終わった後成立したマスハドフ政権が抱えることになった課題を経済、社会、政治の分野にわけて分析を加えた。第三章「マスハドフ政権の平和定着の試みと挫折」では、政権の平和定着の試みを、対露政策、国内政策、地域政策、「外交」政策という4つの観点から分析している。対露政策では、ロシアと抱えていた「領域をめぐる対立」について、マスハドフ政権がどのような原則でロシアと交渉に臨んだか、交渉は特に経済分野では順調に進展し、経済合意が締結されたが、法的・政治的地位の交渉は行き詰まり、経済合意も履行されなかったことを明らかにした。国内政策では、マスハドフの政策を、内閣の構成とその変遷から説明し、独立派野戦司令官への配慮があったことを示した。さらに「政治的イスラーム化」が争点化するのは1998年初めごろからであることを付け加えている。地域政策では、ロシアとの対立状況を側面から打破しようとして展開した、近隣コーカサス諸国に対する働きかけについて叙述している。隣国のグルジアとは関係改善を目指して積極的に外交を繰り返した。アゼルバイジャンとは石油パイプライン再開のため交渉した。部分的ながらこうした交渉が成功し、実利を得た分野もあることを明らかにした。「外交」政策では、マスハドフ政権が欧米諸国に働きかけた「外交」がどのようなものであったかを明らかにしている。政権は、独立承認よりも経済的支援を目的と

したこと、イギリスなどを中心にチェチェン支援の枠組みが出来上がりつつあったこと、それが「政府をめぐる対立」に由来する問題（拉致されていたイギリス人等の殺害）で失敗したことが示されている。未（非）承認国家であるチェチェンが、極めて積極的に「外交」活動をしていたことはあまり知られていなかった。第四章「平和定着の失敗の多角的検討」では、第三章で語られた、マスハドフ政権による平和定着の様々な試みが失敗し、紛争が再発した理由を、紛争研究、対露交渉、国内環境、地域環境（ダゲスタン問題）の4つの視座から多角的に検討している。対露交渉では、「領域をめぐる対立」においてそもそも合意が困難であったこと、ロシア・チェチェン双方の内部でも交渉認識をめぐるズレが大きく合意形成が困難であったこと、経済合意不履行の背景にも双方内部での政治対立や金融危機などの経済問題があったことを明らかにした。国内環境では、チェチェン内部の「政府をめぐる対立」に注目し、政治的リーダーの役割と責任を検討している。その際、反政府系指導者を独自に再分類し、マスハドフ政権の反対派への処遇を個別に検討しなおしている。ダゲスタン問題では、ダゲスタンのワッハーブ主義者の動向がチェチェンを巻き込む形で否定的影響を及ぼし、次第に双方の問題が連結・共振していったことを明らかにした。この指摘は、これまでの通説的理解である、チェチェンがダゲスタンに単に「進軍」したとする見方への反論であり、「ダゲスタン問題」が第二次チェチェン紛争の引き金になったとすると、重要である。この章の最後にマスハドフ自身の責任や政策的余地について論じている。終章では、本論文の結論が簡潔に述べられている。それは、チェチェン紛争を「二重の対立構造」を持った紛争と捉え、1997-99年の紛争移行期間に平和定着の試みがなされたが、98年8月から99年2月頃までに「複合的なディレンマ」と「状況悪化の負のスパイラル」というメカニズムによって紛争の再発を回避することが困難な状況がつくられた、というものである。

以上が本論文の構成と内容であるが、この研究の優れている点を以下列挙する。まず、チェチェン紛争に関する新しい本格的な学問的業績である点が高く評価される。1997年～1999年の極めて複雑な政治過程を独自の分析枠組みと徹底した実証研究によって意欲的に明らかにした功績は大きい。チェチェン紛争がソ連解体後のロシアで起こった最大の紛争であることを考えると、ロシア政治研究の分野での貢献も大きい。先行研究を批判的に検討し、随所で通説を覆し、新知見を示しているなど、本論文はオリジナリティに富んでいる。紛争の理論的な部分と事例研究の分析がうまく有機的に関連づけられている点も評価される。膨大な資料等を丹念に読んで整理・分析しているところも、しっかりした資料の読み方とともに高い評価を得た。大部ではあるが、読みやすくバランスのとれた叙述になっていることも指摘したい。

一方、審査委員から本論文に対する若干の不満、注文が出された。ダゲスタンとチェチェンの関係を書いたことは評価できるが、このことがやや強調されすぎている。マスハドフがなぜ特定の野戦司令官（バサーエフ）を取り込むことに固執したのか説明されていない。ロシア側の内部事情がもう少し書かれた方がよかった。紛争構造と政治指導者の認識

との関係についてももう少し突っ込んで書いてほしかった。誤字が少しだが、散見される。しかし、こうした指摘は、多くが、今後の研究の課題として期待されたものか、語句の微修正の必要性についてであり、全体として本論文の意義を低めるものではない。審査委員会は全員一致で、本論文が高い水準に達しており、学界に大きな貢献をなす論文であると判断した。

したがって、本審査委員会は、本論文の執筆者、富樫耕介氏に対して博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。